

日本天文学会におけるジュニアセッションの現状と課題

The current status and future problems of the Junior Session in the Astronomical Society of Japan

日本天文学会ジュニアセッション実行委員会・世話人会 吉川 真 [1]

Yoshikawa Makoto Junior Session Committee[1]

[1] -

[1] -

子供たちの「理科離れ」や「理科嫌い」ということは、それが言われ出してからすでにながかりの年月が経っている。この状況は、現在でも特に変化していないであろう。一方、大学や研究機関、また科学館などが主催する科学に関連した体験型のイベントは非常に多くなってきている。科学の最先端に触れる機会が沢山あるという意味では、現在の子供たちは、恵まれているといえる。

このような状況のもとで、日本天文学会では2000年春よりジュニアセッションというものを開催している。これは、プロの研究者（アマチュアのアstromerも含む）の研究発表の場である年会において、中学生や高校生に研究を発表してもらおうという試みである。天文学に関して、クラブ活動における研究や、体験型イベントにおける研究、そして個人の研究について、その発表の場を提供しようというわけである。似たような発表会としては、地域的あるいは全国的に行われているコンテストがあるが、ジュニアセッションを始めた頃は、専門的な学術団体が主催する学会の年会の中でこのようなセッションが行われているという例は少なかった。学会の年会で行うということは、コンテストではなく学問の議論の場での発表ということであり、中高生もプロの研究者と同等の立場で発表を行うということになる。この意味で、ジュニアセッションは画期的なものだったと自負している。最近では、他の学会でもジュニアセッションと同等な試みが見られるようになった。

天文学会のジュニアセッションは、2006年春までに合計8回行われている。発表の件数は、毎回増加する傾向にあり、最近では35件程度になっている。第1回から現在までの講演総数は約180件になり、全国ほとんどの都府県からの参加があった。天文学会の場合、年会は春と秋にあるが、春はちょうど学校が春休みになる期間と重なっており生徒が参加しやすいので、口頭セッションを行っている。200名から300名もの参加があり、年会の会場の中でも最も広い部屋を使わせてもらうのが常である。また、参加できない生徒のためには、ポスターによる発表も行っている。最近では口頭発表の時間が少ないので、口頭発表を行う場合にもポスターを掲示してもらうようにし、研究者となるべく議論ができるようにしている。秋の年会については、生徒が参加しにくいので、ポスター発表のみを受け付けている（秋はジュニアセッションの回数には数えていない）。

ジュニアセッションの目的としては、3つ挙げられる。第1には、天文学に関する活動や学習を活性化（エンカレッジ）することである。これは、天文学会という場で発表するということを1つの目標にして、日頃の活動を推進してもらうことを期待したものである。第2には、天文学会の年会の場で天文学の最先端の雰囲気を感じてもらえることが挙げられる。おそらく最先端で何が議論されているかを理解することは困難であろうが、「何かすごいことを議論していたり考えたりしているのだなあ」ということを感じてもらえればよいのである。そして、第3には、実際に天文学を研究している人と話すことによって、天文学の面白さを知ってもらうことである。ジュニアセッションに参加する生徒がすべて天文学に関係した仕事につくわけではなく、むしろそのようなケースはごく少数であろうが、天文学というものが面白いものであるということを知ってもらうことは、天文学のすそ野を広げることにとって重要である。このようなことを通して、より多くの子供たちに天文学を、そして科学を好きになってもらいたいというのが、我々の願いである。

ジュニアセッションに参加すると、中高生の天文に対する関心の高さや情熱がひしひしと伝わってくる。理科離れ・理科嫌いと言われている時代においても、中高生の理科に対する関心は決して無くなってはいないのである。むしろ、ジュニアセッションで発表される内容は、こちらが期待していたものよりもかなり高度なものである場合が多いし、扱う分野も多岐にわたっている。つまり、天文に関してはどちらかというとトップレベルに近い生徒に対して、その能力をより引き出す方向にジュニアセッションは貢献していると言える。このこと自体はジュニアセッションのメリットであるが、さらに欲を言えばより多くの中高生について天文学に関心を持ってもらいたい。つまり、普段はあまり天文学も含めた理学的なことに対して興味を示さないような生徒達にも、宇宙というものが面白いということを感じて欲しいのである。これは、非常に難しい課題であって、ジュニアセッションだけでできることではない。今後も、理科教育に関心のある多方面の人達と協力して、この難しいテーマに取り組んでいきたいと思う。